
IS - とある転生者の軌跡 -

シーバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - とある転生者の軌跡 -

【Nコード】

N6330Z

【作者名】

シーバス

【あらすじ】

とある学生がテンプレ転生した先は「IS」の平行世界。原作知識とチートスペックを使って、もう一人のオリ主や一夏たちと過ごす波乱の学園物語。

GASHI氏の作品「IS インフィニット・ストラトス 真理と最強の剣」(<http://ncode.syosetu.com/n6629z/>)とコラボして(同一時系列で)進行します。よかったです。こちらもどうぞ。

プロローグ？転生？出会い（前書き）

初投稿です。駄文です。

12月24日訂正

プロローグ？転生と出会い

目が覚めると、そこには白い空間が広がっていた。

「んっ、ここは…？」

「おっ、目が覚めたようじゃのう」

「誰かいるんですか？」

振り返ると、そこには白い爺さんが立っていた。

「おぬし、他に言い様はないのかのう」

人がどう言おうが勝手だろ…、って心が読まれてる！？

「そうじゃよ、だからわしは神じゃ」

それとこれは違うだろう…。まあ、昔見たアニメのセリフじゃないが「順応性を高めなさい、あるがままを受け入れなさい」ってやつか。とりあえず認めてみよう。

「んで、その神様が何の用だ？」

「仕事でミスっての、おぬしを殺してしまったのじゃ。それで、どうしようかとおもっての」

は？

「わしらのミスでお主は死んだのじゃよ。いつもなら『転生』で示談になるんじやが…」

示談て…、っーかそんなにミスしてるのかよ。小説じゃあるまいし。

「っーか、何やったのさ？」

「それがの…」

急に口ごもる自称神様、白い爺さん。ろくな原因じゃないだろう絶対。

「休憩中にすっかり書類に、タバコの灰を落としての。」

「アホだ」

やっぱりろくでもなかった。人の命ってこんなに軽くていいのか？

「すまん。ホントにすまん。」

「謝ったって生き返らせられる訳じゃないんだろ？」

「そうなんじゃ。それで…、示談で済まないかの？」

「ま、いつか。籤で決めるのか？」

「いや、あのダーツでじゃ。はずしたり真ん中の灰色のところに出たら、たわしを貰ってバイオハザードの世界に。それ以外なら、そこにかいてある小説やゲームの世界に行くのじゃ。厳密には平行世界というやつじゃが」

そう言っただけで神様が指さす方向には、どこかで見たことのあるダーツが。具体的にはT S系のアトラクションがいっぱいある番組で。パジエを貰えたとしてもバイオハザードは遠慮したいのは俺だけじゃないと思うのだが。普通の世界がいいなあ。そう思って投げた矢は「IS」に刺さった。

インフィニット・ストラトス。通称ISというパワードスーツがあるこの世界は女尊男卑社会であり、そんな中で本来女にしか動かせないISを何故か男である主人公が動かしてしまう、とかいう話だったはずだ。知ってる世界でよかった。

「ではせっかくじゃし、お主もISとやらに乗れる前提で、3つほど特典をつけてやるわい」

3つか…、悩むけど…。

「じゃ、GNドライブのオリジナルを2つくれ」

「それは時が来たら、かの？」

「そうだな、そうしてくれ」

「2つ目は？」

「工作技術チートかな…？」

「専用機をつくるのかの？放っておいても勝手に用意されるじゃろうに？それに、わしゃ努力しないやつは嫌いでの。努力すれば大抵のことはかなりできる、でどうじゃ？」

はあ。

要するに、努力によるのびしろの制限が高いつてことか？

「それって…、かなりのチートじゃね？」

「もしも、お主が努力すればじゃが…。」

「いいのか？そんなに大盤振る舞いで？」

「さっきも言ったがの、平行世界じゃから気にすることもなからうて。して、3つ目は？」

「あと3つチートをくれ、というのは無理…だよな」
ジト目で見られた。

「当たり前じゃろう。これ以上何を望むのじゃ？」

「じゃ、あとで向こうで決めさせてくれ。夢に出たりしてさ。」

「それならよい。では転生といくかの」
どうするんだ？

「あそこの出口を出れば行ける。では、また会おうぞ」

言うと同時に、神様が指さす方向に出口が出現する。近寄ってみると、どこか怪しい感じの扉であった。神様の方に振り向くと『行け』と手振りしている。

俺は覚悟を決めて扉をくぐったと同時に、意識を失った。

そんなこんなで俺は転生した。秋月家の長男、秋月孝として。ちなみに、秋月家は父、母、孝と孝より1つ下の妹の4人家族である。

こちらの世界に来てから早7年が経ち、先週ついに小学生になった。俺としてはとても長い7年であったがこの話はここでは割愛させてもらう。

さて、俺は今篠ノ之道場に来ている。隣の席の織斑に誘われて彼が通う道場に通うことになったのだ。が…。

入門手続きが終わるとすぐに、強そうでとても強そうな年上女子

（高校生ぐらい？）によつて拉致られてしまった。首根っこを掴まれて歩きながら話しかけられる。

「お前か、一夏が連れてきた新規入門者とやらは？腕が見たいからいつぺん試合をしてみろ」

は？いきなり何さ？俺がその新規入門者でなかったらどうするんだか。と思つたら睨まれた。

「逃げるなよ？別に初心者でも問題あるまい。一夏も先週始めたばかりだしな」

「だが断」

パン

「だから逃げるなど言つたはずだ。おい、そこのお前もだ」

いきなり竹刀で人を叩く般若（ギロツ）…もとい“お姉さま”に指名された男の子が動きを止める。あいつは…、神室木？

「わかつたらついてこい、わからなくてもついてこい。道具を貸してやる」

そう言つて先にいくはん…いや“お姉さま”。このまま逃げることも考えたが、殺気が半端ないレベルになつてきたので黙つてついていく。

「あれとこれと…、これでいいか。そこの部屋で着替えてこい」

数分後

言われた通り着替えて部屋を出ると“お姉さま”が待つていた。

「防具はこうやってつける」

いきなり実演を始めた彼女の真似をする。

パン、パン。

一式をつけたと思つたらいきなりの強襲。

「しっかりつけたか？」

叩いてから聞かないで、と切に願う。防具をつけているのにやっぱり痛い。ここで神室木が確認する。

「ルールは？」

「2分以内に1本とれれば勝ちだ。この際チャンバラでも構わんか

「らやってみろ」

「何がこの際構わないだよ、つーか剣道じゃなくてもいいのか？」

「貴様は奥で一夏とやってこい、お前は手前で篠ノ之とだ。全員準備しろ」

「どうやら一夏が相手のようだ。大丈夫だろうか？」

- 5分後 -

結果は引き分けであった。一夏も小学生のチャンバラレベルであったため引き分けられたが、これがもし隣の2人のどちらかだったなら瞬殺であっただろう。2人とも経験なのかセンスなのか、それとも人並外れた運動神経でも持っているのか、物凄い試合をしている。剣先が見えないし。皆さんまさか、揃いも揃って人外だったりしないよね？特にあの般ny:「っ!」

パン

強い殺気を感じて正座から飛び退くと、座っていた場所に竹刀が降り下ろされていた。

「道具を戻したら帰ってよし。それと、周りが強く見えるのはお前らが弱いだけだ、精進しろ」

そして去り際に一言。

「なぜ避ける、というかなぜ避けられる？」

それは…、避けないと死ぬし。主に脳細胞が。鍛え上げれば(?)
わからないけど。

「なら避けられないようにするまでだ。覚悟しろ」

……………なんでさ。

ブログ？転生？出会い（後書き）

感想、アドバイス等あったら投稿してください。よろしく願います。

プロローグ？白騎士事件（前書き）

明けましておめでとうございます。今年は不定期にゆっくり上げていきます。気長にお付き合いください。

プロローグ？白騎士事件

あれから3年。現在小学校4年生である。半年前に両親と妹は、親父の仕事の都合でロンドンへ引っ越していった。え、俺？日本で一人暮らしさ。まさか小3で一人暮らしするとは思わなかったが、たまに（査察しに）帰ってくるらしい。

そして今、俺は地下室でコンピュータを作っている。株やったり株やったり株やったりして貯めたお金で必要なものを買って、工作に励んでいるのだ。技術面に関しては、3年になるまでに市立図書館の工学系のそれっぽい専門書を読んで勉強した。もらった能力と相まって、天災束姉さんレベルの技術はある。たぶん。

去年まではいろいろな理由で自分の部屋で作れる小物しか作らないようにしていたのだが、今地下室で作っているこれは初の大物「量子コンピュータ」である。俺としては某ガンダムに出てきたあれを目指しているのだが、あくまで製作場所は自宅の地下室である。直径何十キロの宇宙船の中枢を丸ごと再現するわけにも行かないので、小型化することにした。小型化したことで地下室に置けるようになったし数年で完成する見込みがついたのは良いが、併せて性能も落ちてしまった。さすがに単独での世界規模の未来予測は無理そうだが、それでも天災束姉さんのPCをハッキングしたりISの戦術支援をしたりするぐらいなら問題ないだろう。

先ほど小物の製作品の話が出たが、具体的には「麻酔銃つき腕時計」「モーターつきスケートボード」などがすでに完成している。これらは主に襲い掛かってくる千冬さんから逃げるときに使うのだが、最近麻酔の効きが悪くなってきたように感じられる。というか千冬さんの復活が早くなってきた。今はまだ短時間でも効果が認められるからいいけど、そのうちまったく効かなくなりそうで怖い。薬物耐性を持った千冬さんとかどんな最終兵器だよ。

そんな千冬さんの親友であり、天才（天災？）科学者の束姉さんからIS用のコアを見せられたのは、小学校4年生になってからであった。束姉さんとは、「モーター付きスケートボード」を作ったときからの知り合いで、ある日いきなり自宅の研究用離れに招待された。

中に入った瞬間、いきなり麻酔銃のことをいろいろ聞かれたが、今回の招待はそれだけが目的ではなく

どうやらISコアのお披露目だったようだ。コアの話は原作ではあまり詳しい説明はなかったはずだからいろいろと質問させてもらった。気をよくした束姉さんに極秘資料まで見せてもらい、聞いているうちにふと思った。

（これは…、作れるかも？）

- 2週間後 -

結果…

「…やっぱりできた！」

とりあえず、試作として1個作ってみた。機体の設計はまだ完成していないが、束さんに知らせずに作ったこのコアは、俺でも動かせることを確認済み。要するに、将来的に（学園で）俺が専用機を持つ準備は整っていたりする。

「束姉さん！！」

ところ変わって束姉さんの研究用の離れ。

「なーにー？またコアを見に来たの？」

「いや、これを見てください。」

そういつて、コアを入れてきた箱を出し、開け放つ。

「この間の話を聞いて、思わず作っちゃいました。秋月印のコア、

「?1です!」

いきなりの展開に、天災束姉さんが固まる。そりゃそうだよな、自分が発明し、自分だけが作れ、そして解析できないブラックボックスであるはずのISコアが、今他人の手で作られて目の前に存在する。俺が束姉さんの立場でも固まるだろう。

「触って確かめていい?」

「いいですよ」

束姉さんが触れた瞬間に、コアは反応して光り出す。

「確かに、本物みたいだね?」

「でしょ?」

「それで…、束さんとしてはたつくんがこれを作ってどうしたいのか聞きたいかな?」

コアを箱に戻しながら問いかけてくる。

「別に際限なく作って世界にばらまくとか、作り方を公開するとかは考えていませんよ、めんどくさいですし」

そんなことをしたら、もはや別の物語である。

「せっかく手に入れたチカラですから、おそらく起こるだろう『IS』による争いから家族や一夏たちを守りたい、ってところですかね。あと、コアに関して試してみたい理論があったりするので、それもやってみたいですけど」

「守るって…、どうやってさ」

「こういうことです」

言いながら箱の中のコアに触れると、孝に反応してコアが光り出す。

「反応した!?!」

束姉さんは2度固まる。

「束姉さん、いくつかお願いがあります。1つめ、僕がコアをつくらせて操縦できるのは僕と束姉さんと千冬さんだけの秘密で。2つめ、ISについて教えてください。特に機体の作り方とか整備とか。3つめ、操縦も教えてください」

「わかったよ」

- 1ヶ月後 -

束姉さんに教えてもらいながら作っていた、初めてのISがロールアウトした。

「不知火」と名付けられたこの機体は、千冬さんの「白騎士」を改良した第1世代高機動汎用型のISである。設計から製造まで束姉さんにサポートしてもらいながら作ったこいつは、主にOSが改良されていて「白騎士」より反応速度などのスペックが上がっていて、IS適性がBである俺が練習で千冬さんを避けられるようになってる。千冬さんの斬撃の余地が出来ることによるのもあるだろうが、一回避け損なつて一撃喰らつて、それだけでダメージレベルBまで行つたときは本気でビビつた。

こんな感じで、俺は千冬さんと束姉さんの地獄の一週間訓練を乗りきつていった。

訓練から半月、俺は普通の小学生に戻って生活していた。

そんなある日、大事件が起きた。そう、白騎士事件である。2000発以上のミサイルが日本に目掛けて発射されたがたった一機の未確認人型機動兵器に殲滅されてしまう、というアレだ。恐らくは束姉さんのマッチポンプだし「不知火」を出す必要性を感じなかったので、自宅地下の量子コンピュータ「カムイ」での逆ハッキングで対処することにした。

白騎士の見せ場を取つたら意味がないし、こちらの存在（つまりは量子コンピュータの存在）がばれたらマズイから、大したことは出来ないけど。さて、どこから落とそうか？

ブローグ？白騎士事件（後書き）

感想・意見・アドバイス等あったら投稿よろしくお願いします。

ブローグ?テロ事件発生(前書き)

やっと書き上がったので、投稿します。

プロローグ？テロ事件発生

- 中2 夏休み -

その知らせは突然だった。

8月10日午後7時ごろ（日本時間11日午前4時）、ロンドンの空港で起きた爆弾テロが多くの市民や旅行者、多くの外国人客を巻き込んだらしい。どうやら同空港で行われていたIS関連イベントとそれに出席するイギリス代表を狙ったものだったようだ。

6時のニュースは、その続報ばかりであった。トースターから焼けたパンをとり、テレビに目を向けると大使館が発表したらしい被害者名簿が画面に流れている。そのテロップを見て、俺は目を疑った。

アキツキタカユキ（44）

アキツキサナエ（38）

アキツキサクラ（13）

「…まじかよ」

名前、年齢ともに家族と一致している。しかも、夏休み休暇で今日帰国する予定であった。空港にいてもおかしくない。

とっさに電話機に飛び付く。かける先は、もちろん親父の携帯だ。

「かかれよ！」

そんなことを呟きながら、コールする。

一回、二回…

されど、繋がることはなかった。

電話を置いて座りこむ。

「どうすればいいんだ…」

安否の確認ができなかった以上、最悪の事態を想定しなければなら
ないだろう。しかし、こういった時に頼るべき親戚というのは、我
が家には存在しない。両親は駆け落ち結婚だったらしく、親戚づき
あいなどは全くないのだ。

悩んでいたら電話がなった。飛び付いて出る。

「もしもし！」

『千冬だ。今、いいか？』

「千冬さんですか…、ロンドンですか」

『そうだ、親父さんたちとの連絡はとれたか？』

「いえ、現時点ではまだ。巻き込まれたっぽいです」

『なんだと？』

「早々に現地入りして、捜したいんですけど」

『いや、私が行こう。お前は学校とか手続きとかいろいろあるだろ
う』

「今、夏休みですから。それに、狙われたのはイギリス代表らしい
ですよ？ブリュンヒルデなんかもっと危ない」

『自分の身ぐらい自分で守るさ』

「そういうことじゃなくって…。まあ、手伝ってもらえるならあり
がたいですけど」

『なら、そういうことだ』

「わかりました、ならお願いします。飛行機決まったら連絡します」
電話をかけてきたのは、ドイツの千冬さんだった。

すぐに、飛行機チケットを取ろうとパソコンを立ち上げる。が、
ヨーロッパ便は運行停止していた。

ふと思い付いて「カムイ」も立ち上げる。同時に「不知火」のリン
クシステムも立ち上げ、2つを接続して話しかける。

「調子はどうだ？」

『問題ない。ロンドンか？』

「ああ、テレビだけじゃ情報が足りない。日本人被害者の名簿からテロ組織の情報までありつたけ集めてほしい」

『了解、少し時間をくれ』

彼は、支援用疑似人格AI『森羅』。通称『シン』。情報収集から戦闘支援まで、何でも出来るように最近組んだAIである。普段は「カムイ」の方にいるが、時には意識データをISに移して戦闘のサポートをすることも可能な、けっこう万能なやつだ。

話がずれた。そうだ、今のうちに「不知火」の整備といくか。

- 3時間後 -

『孝、出たぞ』

「どうだった？」

『まずロンドンの方だが、「カムイ」の演算予測によれば間違いなく3人とも巻き込まれている。それに、残念だがどの名簿にも載っている。見込みは少ないだろうな。それから、事件を起こしたのは反ISと篠ノ之束殺害を目的に掲げているテロ組織『アル・カリダ』と判明。一番大きい拠点はアメリカ・カルフォルニアの砂漠地帯にあるらしい。今詳細データを転送する』

「…、そうか。了解した」

『どうする気だ？』

「ちよつくら復讐をな」

『待てよ。戦いからは何も生まれない、復讐は復讐を生むだけだ。それでもやるのか？』

「確かにそうだろう。復讐したところで空しさが残るだけだったりするんだろ。けどな、今俺は何よりも、家族を守るとか言って不知火を持っておきながら、結局全然守れなかった自分に腹が立つて

るんだ。たとえこの復讐が世界に喧嘩を売る結果になっても、俺は行く」

『いいだろう、今夕方のロサンゼルス行きの飛行機の予約を入れておいた。これから、意識データをそちらに移す。30秒待ってくれ』

「ありがとう」

『それで、作戦プランだが…』

- 11日午後8時（アメリカ東部時間） アメリカ・モハヴェ砂漠 -

満天の星空。一面見渡す限りの砂漠。人っこ一人いない。

『ここら辺だな』

「了解。不知火、起動」

右手の黒いブレスレットが光に包まれ、次の瞬間、黒い装甲が身体を覆う。

『不知火、戦闘ステータスに移行』

「確認した。不知火、秋月孝、目標へ向かう」

少ししゃがんでからスラスターを点火する。

しばらく飛ぶと、ハイパーセンサー越しに熱源反応がある廃墟が何軒か見えてくる。

「ん？シン！あれじゃないのか？」

『のようだな…！？ミサイル接近！！気付かれたか？』

「つと！」左手に呼び出したシールドで防御する。

『廃墟裏に熱源反応が2、戦闘機だ！』

「離陸前に潰す。不知火、秋月孝、プランB56にて目標の排除行動に移る」瞬時加速でタキシング中の戦闘機の前に躍り出て、レーザー刃ブレードで翼を切り裂き無力化する。奥のシエルターにも出撃準備中の機体がいくつか見えているので、そちらに向かおうとする。が、

『砲撃が来る、回避しろ！』

「どこから!?」

『8時方向の廃墟横、地下道出口に戦車が展開!数は20以上!!』
「数だけでも!プランC18に移行する」

知つての通り、たとえ戦車といえども従来型兵器ではISに対抗できない。砲撃を回避しつつ近づき、ハンドグレネード(自作のテルミット焼夷弾タイプ)を投擲する。まだ距離があつたが、戦車部隊の真ん中に落ちたそれは業火を生み出して、戦車を飲み込む。周りから焼かれて、戦車の中はオープンと化しているはずだ。

『ミサイル急速接近、回避しろ!』

この隙に発進を狙つた残りの戦闘機隊は4機が上空からミサイルを撃つてきていて、2機が上昇中、4機が滑走路から離陸中であつた。何もいなくなつたシエルターに荷電粒子砲を撃ち込み破壊、振り向き様に実弾ガトリングで上昇中の1機を叩き落とす。残つた1機は戦意を失つたのか、戦域外に離脱していく。『再びミサイル急速接近、回避しろ!』

忘れるな、とばかりに上空の4機が撃つてくるが上昇してすれ違いながら、1機の翼を切り裂いて墜とし、振り向いてガトリングで2機を蜂の巣にする。上空のは残り1機。

ふと地上を見ると、いつの間にか廃墟の周りに対空機関砲ほかの装甲車が展開している。弾幕でまだ地上にいる戦闘機の離陸を援護するようである。

『対空機関砲が10以上、IFV(歩兵戦闘車)ほか戦闘車両が40以上!!歩兵まで!』

「プランG24だ!」

対空砲の弾幕に喰われないよう、高度をとってガトリングと荷電粒子砲を撃ち下ろす。

少し無駄に撃つたせいで、ガトリングの弾が切れるが、クイックリロードで対応する。懲りずにミサイルを撃つてくる戦闘機がいたが、かわすと角度が悪かつたためか自ら地上部隊の弾幕に突っ込み墜ちていく。

「あと4機か？」

『いや、さっきの戦闘機が滑走路に墜ちたから上がってこれなくなつたはずだ。事前の調べから見ても、あとは地上部隊だけのはず』

「了解、仕上げるに移る」

一応、高度を少し上げて空中に静止する。

「不知火、目標をなぎ払う！！」

荷電粒子砲を収束掃射モードに変えて、砲門を開く。

不知火の中で一番シールドエネルギーを食う一撃が、ここの廃墟群で一番大きな寝床用らしい廃墟と指揮所とおぼしきテント、まだ残っている地上部隊、滑走路上で立ち往生している戦闘機部隊もまとめて塵に返す。

『戦闘終了。終わったな、孝』

「ははっ、ははははっ。確かにこりゃ空しいな。けど、ちょっと達成感も……」

ピピッピピッピピッ

「何！？」

『こちらに接近する機影が1つ！』

はじめましてだな！襲撃者さんよう！！

高速で接近しながらライフルを撃ってくる異形の機体。

ガガッ！

とつさに機体に回避機動をとらせる。

「なんだよありやつ！ISかつ？」

『恐らくは疑似ISだっ！コアの反応はない！それに男が操縦しているようだ！』

傭兵稼業の邪魔をしやがって！

人型の上半身にホバークラフトのような下半身、夜には見づらい紫の塗装だが、機体から放たれるのはどこかで聞いたことのある声。

「まさか！？」

ガガッ！

リニアライフルが避けられず、荷電粒子砲に直撃を喰らう。とつさ

にパージして爆発から身を守り、ガトリングで反撃するも全くあたらない。完全に相手のペースにのまれた。

ここで潰す！！

「くっ！」

相手の突撃に反応が追いつかない。

ドンッ！

衝撃をもろに受け、地面に背中から落ちる。

「がはっ！」

紫の敵機は蜘蛛のような足を展開して真上に降りてくる。

「やっぱりアグリッサか！」

逝っちまいなっ！

「ぐあああっ！」

展開されたプラズマによるじわじわと身を焼かれる痛み。

どうだっ？このシュピンネのプラズマフィールドの味はっ？コアだけ遺して逝っちまいなっ！

刹那。

アグリッサ（敵さんの言うところのシュピンネ）が爆散した。

『こちらはアメリカ軍だ。その2機。今すぐ撤退しろ。勧告を聞かないのなら、武力をもって排除する』

ハア！いい度胸じゃねえか！ちったあ楽しませてくれよ！

突然現れたもう1機のIS。ディスプレイにはアメリカ軍所属『ヴェリタ』と表示されているが、どう見たってユニコーンガンダムである。頼もしい限りだが。

『ヴェリタ』はオープンチャネルへの合成音声の勧告とともに『シュピンネ』から離脱した敵本体と交戦を開始する。勧告より先に排除行動を始めていることは気にしない。気にしてやらない。

「シン、無事？」

『ああ、何とかな。かなり回路をやられたようだ。戦闘機動はむりだな』

「もし、できるようならあれを録画しといて。あの機体、普通じゃない。全身装甲な上、さっき撃ったのは、多分…ビームライフル」
『了解した』

『その程度で！』

イナクトもどきのリニアライフルを軽くかわし、ビームサーベルを展開する。

「ビームサーベルも！？」

ハッハア！いいねえ、こうでなくちゃあなあ！！
何度も斬り結ぶが決定打にはならない。

『一気に行くぜ！』

痺れを切らしたのか『ヴェリタ』のほうがライフルに持ちかえ突撃、交差した瞬間に下と見せかけて瞬時加速で後ろに回り込む。まだまだあ！

見事に引っ掛かり、イナクトもどきは下を向くが、もちろん何もいない。な、何！？どこだ！？

その隙に、後ろから2筋のビームがイナクトもどきに直撃する。

チッ！何だつてんだ！？

『索敵がザルだな。後ろがお留守なんだよ』

チッ！エネルギーが持たねえか。覚えてやがれ！

不利と見たのか、イナクトもどきは悪役のセリフを残して、牽制射撃をしながら撤退していく。

それを見届けると、『ヴェリタ』はこちらに振り向き、ビームライ

フルを突きつける。

『貴様も撤退しろ。さもなくば、排除する。』

ここでこいつと戦う意味もないし、当初の目的は達成している。何よりも機体に不備があるので、おとなしく従うことにする。

「了解した。ありがとう。」

一言礼を言って機体を町に向ける。

『録画終了、機体を通常モードに移行』

「シン、ダメージレベルのチェックを」

『報告、ダメージレベルE。帰ったらオーバーホール、というか作り直したほうが早い。今飛んでいるのも不思議なくらいだ』

「しゃーねーな、あのイナクトもどき。あとで調べてみるか」

この出会いが、後に因縁となることはこのときに予想できるはずもなかった。

ブログ？テロ事件発生（後書き）

感想、意見、アドバイス、誤字指摘、その他、些細なことでも駄文改善の糧にしたいので、投稿をお待ちしています。

オリ主設定？（プロローグ）＋「森羅」（前書き）

プロローグから第1話時点でのオリ主設定及びA Iの設定です。第3話ぐらいまでのネタバレを多少含みます。

オリ主設定？（プロローグ）＋「森羅」

名前 秋月 孝（あきづきたかし）

性別 男性

身長 172？

体重 68？

専用機 不知火 不知火・夜風

趣味 研究、工作、アニメ鑑賞、読書

特技 ハッキング、剣道、水泳

好物 麻婆豆腐

誕生日 9月4日

IS適性 B（小5） B＋（中2） A（学園入学時）

経歴・素性

・実は転生者。転生特典としてIS適性のほか、オリジナルのGNドライブを2つ、努力による成長チート、それともう一つ何かをもらう。

・転生後の家族構成は、商社マンの父親（孝之）、専業主婦の母親（早苗）、一つ下の妹（さくら）の四人家族。
・一夏、箒、神室木、鈴の幼なじみにあたる。

・小学1年生の時から一夏、箒、神室木と篠ノ之道場に通う。・小学3年生の時（夏休み）に両親が転勤でロンドンに赴任。引越しを嫌って一人暮らし。

・小学4年生までに「麻醉銃付き腕時計」「モーター付きスケートボード」を、4年生の時に「量子コンピュータ『カムイ』」「ISコア」を自作する。

・その後、東と「不知火」を共同開発。東 & amp・千冬による1週間の「訓練合宿」を乗り越える。

・白騎士事件の時には、「不知火」はすでに完成していたが、あえて『カムイ』で介入、多数のミサイルをハッキングにて撃墜する。

・14歳の時、両親と妹がロンドンの空港で起きた自爆テロに巻き込まれる。家族の遺体は見つからず、それ以来テロを憎むようになる。また、その時に「不知火・夜風」で事件を起こしたテロ組織のアジトを急襲、破壊するも突然現れた傭兵「ウィリアム・ヴァレンシュタイン」とその乗機の疑似IS「フックバインカスタム」に敗北。鎮圧に現れた神室木に助け出されるも「不知火・夜風」は大破する。

・その後オリジナルのGNドライブが届き、「フォルティス」の製造を開始する。

・中学3年生の冬、一夏とともに藍越学園を受験するが、孝の故意の誘導によりISを起動、IS学園に入学することになる。

・クラス代表決定戦は「フォルティス」が未完成のため、学園の「ラファール・リヴァイブ」で参戦する。

その他

・努力による成長チートのおかげで、篠ノ之 東と同等かそれ以上の天才で、研究仲間。・ドライブ自体は転生特典だが、GN粒子に関する研究理論の第一人者で、「GN粒子を用いたビーム兵器」の実用化に成功、「フォルティス」に搭載する。

・転生後15年経つものの、けっこうしっかりと原作知識の記憶をもつ。

・ 転生したためか精神年齢は年の割には高め。原作知識持ちという事情もあって、仲間内では年上リーダー的な立ち位置にすることが多い。

・ わりと冷静だが、テロ関係の話題はアウト。（プロローグ？参照）
・ あまり優しくない。
・ 興味優先の行動をとるが、興味が無くとも仲間のフォローはしっかりする。ただし、本気で興味が無いことにはいい加減にあたる。
・ 剣道の入門（プロローグ？後半参照）により、織斑 一夏、篠ノ之 箒、織斑 千冬、篠ノ之 束、神室木 双矢と親交が深い。

正式名称 森羅（しんら）

通称 シン

性別 男性

対応機 不知火・夜風、フォルティス

備考

・ 孝が中1の時に組み上げたサポートAI。通常は「カムイ」にいるが、意識データをISに移すことで戦闘のサポートも可能。
・ 情報収集、ハッキング支援、戦術予測、戦況分析などが可能。さらにプログラムを追加すれば機能を拡張できる。
・ 主にプライベートチャンネルで会話するが、オープンチャンネルも一般的な無線などでも可能。

オリ主設定？（プロローグ）＋「森羅」（後書き）

補足設定

本編プロローグでは、秋月は神室木に救われたことを知りませんが、ISの特徴などから、薄々ですが気づいています。

オリIS設定? 「不知火」 「不知火・夜風」 (前書き)

プロローグで運用されていた主人公機の詳細です。

オリIS設定? 「不知火」「不知火・夜風」

名前 不知火（しらぬい）

形態 第一形態

待機状態 黒いブレスレット

製作者 秋月孝・篠ノ之束

操縦者 秋月孝

世代区分 第1世代高機動汎用型IS

武装

- ・近接実体ブレード×2
- ・荷電粒子砲×1
- ・シールド×1

その他

- ・孝が束とともに完成させた世界で2機目のIS。孝が作った1つ目のコアが使われている
- ・部分装甲で、外見的には「黒い『白騎士』」。
- ・ベースは「白騎士」そのものだが、OSなどのソフト面やスラスターなどのハード面の両面にわたり「白騎士」の試験稼働データをフィードバックして最適化しており、カタログスペックは「白騎士」を上回る。

・現実的には千冬の技術に孝が追い付いていないため、模擬戦では良く引き分けがせいぜいである。

名前 不知火・夜風（しらぬい・よかぜ）

形態 第二形態

世代区分 第1・5世代高機動汎用型IS

武装

- ・レーザー刃付き近接実体ブレード×2
- ・肩部荷電粒子砲×2（左右に1つずつ）
- ・アンチレーザーシールド×1
- ・六銃身実弾ガトリング砲×1（シールド裏に接続可能）
- ・ハンドグレネード×6

その他

「不知火」の第2形態。

部分装甲。スラスター数が増えたため、「不知火」より高機動。基本スペックは「ラファール・リヴァイブ」クラスだが、「フツケバイン」よりは劣る。

プロローグ?にて、対テロ復讐ミッションに投入される。当初の作戦目標は撃破するも、突然現れた「フツケバイン・カスタム」により大破する。

その後、搭載されていたコアは「フォルティス」に移設される。

オリIS設定? 「不知火」 「不知火・夜風」 (後書き)

次は、オリIS設定? 「フツケバイン」 シリーズ(1)です。

オリIS設定? 「フツケバイン」シリーズ(1) (前書き)

プロローグに出てきた敵機の設定です。

オリIS設定?「フツケバイン」シリーズ(1)

名前 フツケバイン先行量産型

設計者 不明

製作者 不明

世代区分 第1世代汎用型量産疑似IS(第二世代型IS相当)

基本武装

- ・ソニックブレード兼プラズマブレード×2
- ・リニアライフル×1
- ・ディフェンスロッド×1
- ・小型ミサイル×6
- ・腰部小型機銃×2

換装パッケージ

ランドパッケージ

「陸戦強化用装備」

- ・追加リアクティブアーマー
- ・肩部バズーカ×2
- ・リニアガトリングライフル×1

飛行不可

デザートライカーパッケージ

「砂漠戦用装備」

- ・下部移動用ホバークラフトユニット
- ・肩部200?リニアキャノン×2
- ・対空対地兼用小型VLS(16セル)×1
- ・対空レーザー砲塔×2

備考

・設計、製作場所不明の世界で初めてだと思われる疑似IS。少数が闇市場で売り買いされていることが「カムイ」によって判明している。

・コアが使われていないため量産可能、男でも操縦可能。

・同様の理由で、絶対防御は未装備。

・推進系は水素ジェットで、通信系はレーザー通信で代用している。ただし、推力不足で低空飛行がやっと。

・全身装甲で、一般的な装甲車程度の防御力を有する。具体的には対戦車ロケット弾で大破する程度。

・ISに比べて防御力はかなり劣るが、維持費が安いこと、段違いな生産性、訓練すれば適性に関係なく操縦できることなどがメリット。

・基本スペックはフランス製第二世代型IS「ラファール・リヴァイブ」と同等。

・また、ISにおけるパッケージ換装システムも用意されているためあらゆる戦況に対応できる。

・基本的には他の兵器を数で圧倒する戦術をとる。

名前 フツケバイン・カスタム（強化試験型）

世代区分 第1・5世代汎用型疑似IS（第2・5世代IS相当）

操縦者 ウィリアム・ヴァレンシュタイン

武装

- ・大型ソニックブレード兼プラズマブレード×2
- ・カーボンブレード付き強化型リニアライフル×1
- ・大型ディフェンスロッド×1

- ・クラスターミサイル（14発内蔵）×4

- ・その他、必要に応じて全身のハードポイントに搭載

専用パッケージ

- 「対IS用装備（シュピンネ）」

- ・多脚式プラズマフィールドユニット

- ・ヒートクロー

- ・追加推進システム

その他

- ・「フツケバイン」の強化型。全身装甲。全面改良し、「不知火・夜風」より高機動。基本スペックの一部は第三世代クラス。

- ・プロローグ?にて、初登場。終始「不知火・夜風」を圧倒、大破させる。しかし、「ヴェリタ」によりシュピンネは撃破、機体自体も小破し撤退する。

オリIS設定? 「フツケバイン」シリーズ(1) (後書き)

系列機が今後多数登場予定なので、分割して投稿します。

第1話　そして物語は始まる（前書き）

いまだに行間の取り方がうまくできていません。
読みづらかったらすいません。

第1話　そして物語は始まる

そして1年半が過ぎた。あの事件以降いろいろあって…

パンツ、バシッ！

「いつー!？」

「何やってんすか？千冬さん」

「ほう、受け止めたか」

今俺はこうして般若の一撃を受け止めている。端から見ると非常に不思議な光景となっているだろうが、こうなったのにはもちろん理由がある。

話は少しさかのぼる。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

さつき自己紹介をしていた山田先生。見た目は中学生でも、中身は一応先生らしい。あだ名は数多く、このSHRが始まるまでの15分で3つは聞いた。もっとあったはずだから、今後ますます増えるのだろう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

なぜか静まり返った教室。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

この副担任、かわいそうだと思わなくもないがそんな余裕はない。理由は至極簡単なことで、俺と一夏と双矢（アメリカ力代表候補生なんだとか）以外に、この教室にいるすべての人間が女性であるから

だ。

（しっかし…、こうなることは承知の上で乗り込んできたが、予想以上にづらい…。右2人以外、全員女性か…）

ぱつと見、教室の席順はランダムに決まっているようだが、なぜだろう、真ん中の列の1番前に一夏がいて、その左隣が俺、右隣が双矢である。ちなみに俺の左後ろに篤がいる。男子は前に集められたか。

そして実際問題、突き刺さる視線が痛い。

（耐えきれないな）

そう思ったときに自己紹介の順番が回ってきた。

「えっと、秋月孝です。一夏のバカに巻き込まれてここに来ました。趣味は読書、特技は工作です。気軽に声をかけてください。一年間よろしくお願いします」

とりあえずしれっと嘘を混ぜつつ、うまくまとめて座る。まあ何が嘘かというと、一夏を偽の（ES学園の）入試会場に連れ込んだのは俺だったりするということだ。一夏の方角音痴ではなかった…とは言わないが。

（つといけね、耳栓耳栓つと。）

「きゃ……」

「はい？」

「へ？」

順にクラスメイト、山田先生、一夏。

ビックウェーブの予感に、思わず友に念じる。

（一夏、双矢、耳塞げ！）

双矢が耳を塞いだその時、絶叫が教室を襲う。

「きゃあああああつー！！」

「きゃー！男子よ、2人目の男子！」

「頼れる系の！」

「背中を守ってほしい！」

「地球に生まれてよかったー！」

「神様ありがとう！来年の初詣のお賽銭、奮発して500円入れちゃう！」

「あの顔は攻めね！」

「どっちの男子とからめようかしら？」

「次の同人の題材はこれで決まりね！」

耳栓を着けたにも関わらず、激しい頭痛をもたらす超音波攻撃。我が1組だけでこの威力？他のクラスの兵（生徒）を押し留めている先生方、ご苦労様です。というか最後の3人、それはかんべんしてくれ！

「皆さーん、お静かにー！」

なかなか静かにならないクラスを静かにさせようと、かなり必死な様子の山田先生（涙目）。やっぱ、あの人じゃないと…。

って！？そういえばこの後暴君が現れて一夏が…、いや、今クラスが騒がしいのは俺が原因だよな？俺が叩かれるのか？？とりあえず一夏で誤魔化そう！

「山田先生！」

「ひゃ、ひゃい？」

「時間が押してるようなので、次は一夏にしたらどうでしょうか？」

「っ！！そうみたいですね。では織斑くん！」

時計を確認して、確かに時間がヤバいことに気づいたようで、てきぱきと話が進んでいく。

（うわ、立ち直り早いな…）

「織斑くん、織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ！？」

いきなり呼ばれたことに驚いているのだろうか、裏返った声での返

事にくすくすと笑う声が聞こえる。周りが女子ばかりで落ち着かない状況に加え、笑い声に気づいたのか余計にそわそわし始める。

「あっ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

何をどう間違えたら「裏返った返事」が「怒ってる」ように聞こえるのかわからんが、単に緊張しているだけの一夏をなだめるべく、山田先生がものすごく下手に出ている。

（頭下げすぎでしょ…）

「いや、あの、そんなに謝らなくとも……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？や、約束ですよ、絶対ですよ！」

一夏の手を取り、熱心に詰め寄る先生。って近っ！！一夏に刺さる視線が数割強くなった気がする。頑張れ、一夏！

そして…、突き刺さる視線を物ともせず後ろを向いて立ち上がった一夏は、こう言った。

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

（ちょっと待て、まさかそれで終わりとか言わないよな？先に俺がやったの聞いてた？趣味は料理、特技はマッサージとか言えないか？ここで黙ったらただの『暗いやつ』だぞ？いいのか？）

一瞬目があつたので、これでもかというぐらいにアイコンタクトで語りかける。一夏は小さく頷き…、俺の思いは…、

「以上です」

案の定届かなかった。さすがは一夏クオリティ。
がたたつ。教室後方で何名かの女子がずっこける。

果たしてあいつは、山田先生の涙が増量されていることに気づいているのか？

そんな愚問が脳内に浮かんだときに、かなり強い殺気を感じた。とつさに手で頭をかばう。
パアンツ、バシツ！

一夏の頭を強打した後、流れるようにこちらに向かってきた出席簿の面を受け止める。

「いつてえ！？」

頭を押さえて転げ回る一夏は無視して問いかける。

「何やってんすか？」

「ほう、受け止めたか」

突然のあまりにカオスな展開にクラス中が固まる中、おそろおそろといった体で振り向いた一夏は、いつの間にか教室に入ってきていた襲撃者の姿を見て一言。

「げえっ、関羽！？」

パアンツ！

二撃目！

（あさはかなり）

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

（そもそも性別違うし。この場合は孫尚香の方が…、いや、やっぱり般若か？）

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

（押しつけたんかい！ったく、どうしようもねーな！）

「いえ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

これがカリスマ性というやつなのか？山田先生の変わり身の早さにも毎度驚かされるが。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞け。いいな」

（出たな、暴君！これだからいつまでたっても嫁に……）

バシンッ！

今度はギリギリだったが、何とか防ぐ。何度も喰らってボケたらたまらない。

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

再び皆が固まるかと思いきや、黄色い声援が響いた。

「きゃー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずつとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

（北九州？近い近い！憧れてって訳じゃないけど、異世界からきたやつがここにいるからね？ってか、偽物の千冬さんってどん……、

あ、VTか？）

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいですよ！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

死ぬなんて簡単に言ってくれるなよ、意外とあっさりしたもんなん

だぞ！

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」意外とそんな気がするのにはなぜだろう？十蔵さんにでも聞いてみようか？

「きやあああつ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「でもときには優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてー！」

はあ、元気があつて何よりだが、限度とかいうものを考えてほしい。ず、頭痛が…。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺はー」

パンッ！

本日三撃目。いや惨劇目。災難だなあ…、一夏。

「ここでは織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男で『IS』使えるっていうのも、それが関係して

……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

あの人と同居だと？俺は…嫌だね…。

「んんっ。さて、男子はもう一人いるわけだが…。神室木、自己紹介しろ。真面目にな」

「はい。えっと、神室木 双矢です。色々と面倒なので、趣味その他は割愛します。興味のある人は自分で聞きに来て下さい。以上。」

（お前もかよっ！！）

バゴンッ！！

もちろんすぐに、一撃が入る。

ただ…

（角で直撃だ！？）

出席簿で出せるのか微妙な音が廊下まで響く。

その音にクラスメイトは凍りつき、山田先生は涙を増量させる。

「ふむ、どうやら貴様は『真面目』という言葉の意味を理解していないようだな。貴様の頭に直接叩き込んでやろう。」

神室木は黙って俯いている。

いや、「グリグリ」という音が聞こえるから俯かされているのか。

「だ、大丈夫か？」

皆を代表して一夏が聞く。が、

「皆、どうしたんだ？そんなにジロジロ見るなよ。見世物じゃないぞ、俺は。というか織斑先生、それ邪魔なんでどけて下さい。上向けないでしょ。」

予想の斜め上に行く回答に、誰もが啞然とする。

その時、チャイムが鳴った。千冬が口を開く。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らには、これからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。良いか？良いなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ。」

要は、返事さえあれば良いのか？よろしい、ならば実践してやる。

こうして、混沌としたSHRは終わったのだった。

第1話 そして物語は始まる（後書き）

意見・アドバイス等気軽に書き込んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6330z/>

IS - とある転生者の軌跡 -

2012年1月14日16時49分発行